



2000 年 (平成 12 年)
8 月号 (No. 663)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円

目 次

山のトイレ問題を考える	1
第42回有志懇談会	5
報告	
海外連絡委・ドイツ山岳会シュ ベルト氏の講演と日本山岳会	6
総務委・委員会、同好会連絡会議	7
アルパタ実行委・歓送会	7
図書管理小委・北海道支部へ図 書寄託	7
フィルムビデオ委・購入ビデオ	7
海外連絡委・カザフから招待	8
自然保護委・白神の植林に参加	8
丹水会・大室山、鐘撞山行	9
二火会・石砂山、石老山へ	9
ひとくちインターネット	7
支部だより	
石川・北陸三支部合同登山	10
信濃・第54回ウェストン祭	10
福井・夜叉ヶ池山清掃登山	10
越後・隠れた名山、馬ノ髪山	11
海外の山	12
東西南北	
岡則吾結峰に初登頂	13
第2回森の勉強会	14
山岳博物館散歩・4	15
ルートファインディング考・下	16
図書紹介	18
新入会員・図書受入報告	20
ルーム日誌	20
会務報告	21
INFORMATION	22
▶ 日本山岳会事務 (含図書室) 取扱時間	
月・火・木	10~20時
水・金	13~20時
第2、第4土曜日	閉室
第1、第3、第5土曜日	10~18時

山のトイレ問題を考える

科学委員会担当理事・森 武昭

一、はじめに

最近、山小屋など山域で発生する生ゴミやし尿による環境保全への影響などが深刻な問題として提起されている。例えば、富士山では便槽内に捨てられたティッシュペーパーなどのゴミが放流の際に白い筋となつて残るといった現象が起きており (P4の写真参照)、景観上・衛生上はもろろんのこと、富栄養化など自然環境を保全していく上で大きな問題となっている。このため、世界の自然遺産への登録申請はとも困難といわれている。この現状は、富士山に限らず、わが国の多くの山域で共通した問題であるだけでなく、わ

が国から多くのトレッキング客が向くヒマラヤ地域でも同様の問題が提起されている。

この問題を少しでも解決しようとの動きが最近活発化している。すなわち、最近になって、技術面での進歩、自然環境保全への意識の高まり、現状放置への危機感などを背景として、問題の重要性が徐々に認知され、ここ数年で大きな流れとなっている。平成九年以降、日本トイレ協会 (二回)、信濃毎日新聞、富士山エコ・トイレ勉強会などがシンポジウムを開催し、熱心な討議を行っている。このような社会的要請を受けて、環境庁・都道府県・市町村といった

行政もここ数年で直接・間接にトイレを設置したり、補助金を交付したり積極的に取り組み始めている。

また、山小屋でも、一部では具体的にいろいろな対応策を講じている。これらは、自費または補助金との組み合わせで行っている。また、多くの山小屋関係者がその対策の必要性を承知しており、技術的保証やコストの問題を注意深く見守っているのが現状である。

ところで、筆者も、平成十一年度に、(財)広域関東圏産業活性化センター (通産省の認可法人) の「山岳観光地における環境問題調査研究会」(委員長・田部井淳子) と(財)自然環境研究センター (環境庁の認可法人) の「富士山頂上部における保護と利用のあり方」(座長・筆者) に委員として参加した。

本稿では、これら委員会での審議

過程や報告書で述べられている事項をもとに、山のトイレ問題解決への動きと今後の課題を述べることにする。なお、本稿では、より困難な問題であるし尿処理に絞って述べ、生ゴミについては別の機会に論ずることにしたい。

二、山岳トイレの現状と問題の背景

信濃毎日新聞 (平成十一年七月二十日付) のアンケート調査結果によれば、対象とした北アルプスの稜線近くにある山小屋四十四軒のうち、約九〇%の三十九軒がし尿を穴に埋めたり、崖や沢に放流していることが明らかにあった。その量は、一年間で二千五百トン以上に及ぶと推定されている。処理対策している小屋は、ヘリによる輸送が三軒、浄化槽による処理が二軒であった。全国的にみても、大部分が放流・地下浸透

に依存しているのは、ほぼ同じ状況にあると思われる。

山のトイレ問題の深刻さが指摘されるようになった背景を整理すると、次のような点があげられる。

①登山者の量的問題点・中高年者を中心とした登山者の急増、百名山ブームに代表される登山者の特定山域への集中、業者などによる団体登山などにより施設面で対応できなくなってきた。

②登山者の質的問題点・トイレへの異物の投入などにみられるように社会的マナーの低下が、し尿処理をより難しくしている。

③従来の登山者マナーの限界・前記①と②を背景として、自然の浄化作用に依存していた従来の方式（雄撃ちや花を摘むといった隠語に代表される方法やし尿の放流・浸透）が許容されなくなってきた。

三、山岳トイレの技術的動向

このような状況を背景として、山岳トイレの技術も阪神大震災の教訓と相まって飛躍的に発展した。環境に優しい山岳トイレの技術的検討では、立地条件が重要な要素となり、道路・電気・水の有無によつてそれぞれに適したし尿処理方式が提案されている。山小屋がおかれた状況と対策の関係を具体的に例をあげて図

に示す。

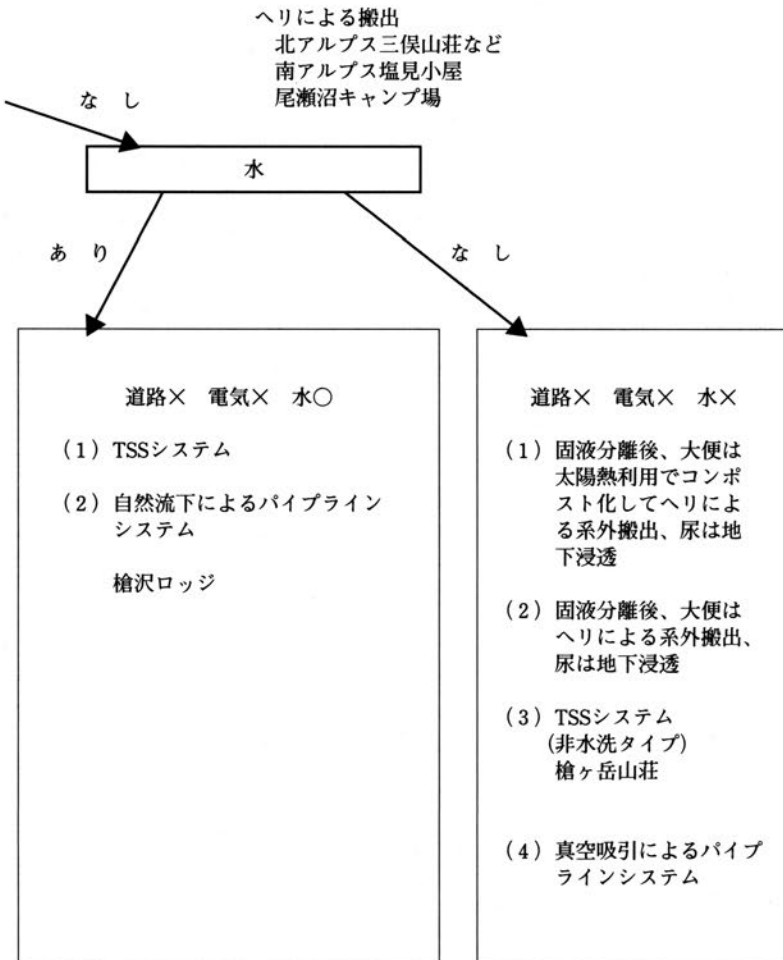
このように、技術的な進歩により、それぞれの立地条件にあった処理法を選択できるようになってきた。しかし、山岳地域では気温など気象条件が厳しい上に冬期はほとんど未使用といったことが、トイレの機能にどのような影響を及ぼすかを現実実績をもとに見極める必要がある。さらに、技術的には可能であっても、

現実には初期設備投資と維持管理に要する費用という問題が重要な要素となる。

いずれにしても、トイレの設置にあたっては、立地条件を考慮してそれぞれに最も適した方式を採用し、それが重要であるが、過度のインフラ整備とならないように、コスト面も十分に考慮することが肝要である。

四、改善へ向けた動き

環境庁では、平成十年度に、富士山の富士宮口五合目（間欠ばっく活性汚泥処理方式に凝集剤を付加した方式）と富士吉田口下山道七合目（排泄物を乾燥させて少量の灰にし、紙パックで回収する方式）に億単位の資金を投入して公衆トイレを設置した。また、環境庁では、平成十一年度の補正予算（山岳環境浄化・安



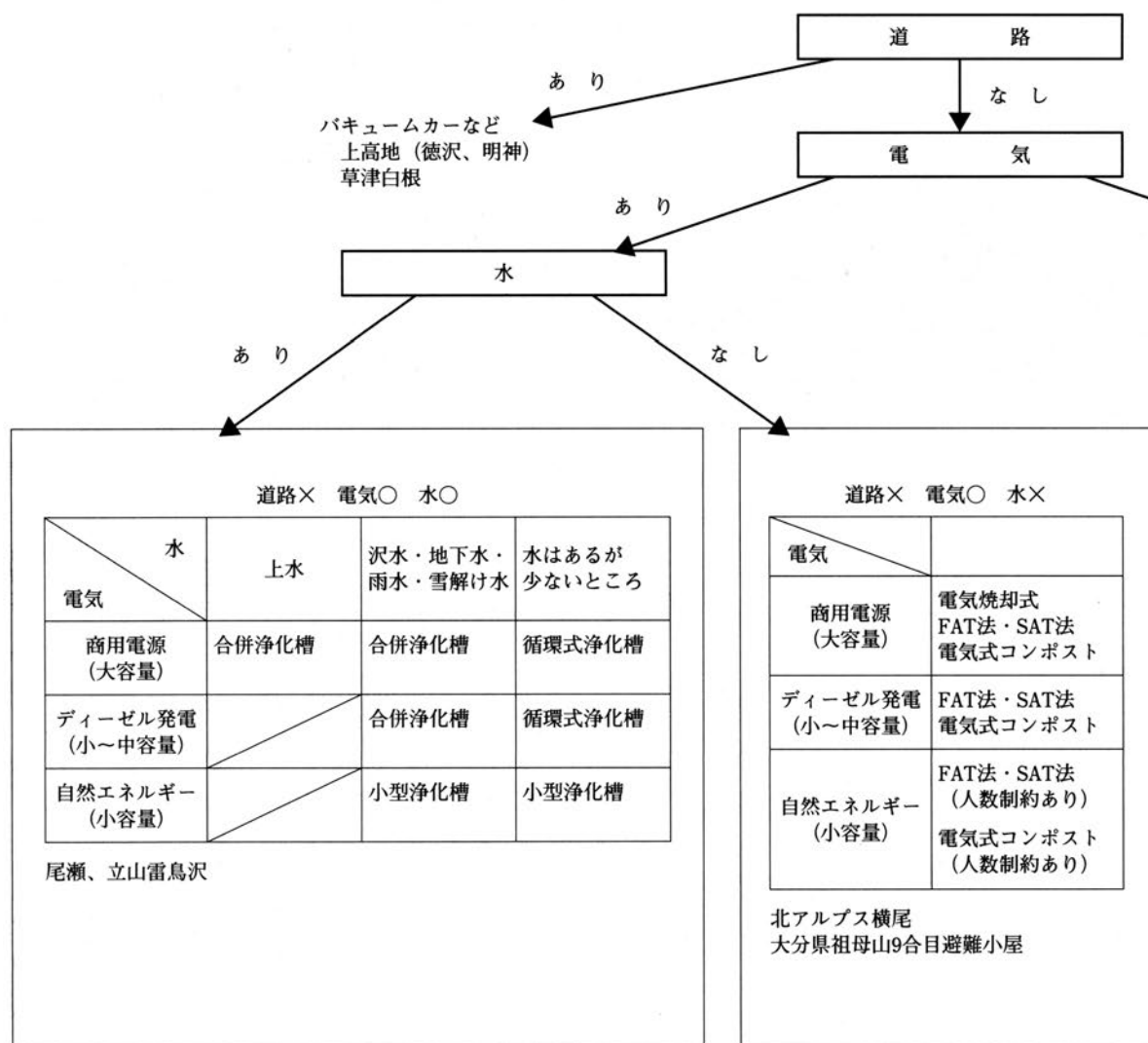
TSSシステム：腐敗槽による嫌気処理を施した後土壌処理する方法。

電気式コンポスト：し尿を電気ヒーターで加温し、バイオチップと一緒にモーターで攪拌処理する方法。

全対策事業費)で全国十の山小屋に
対して、総額一億三千万の補助金
(補助率五〇%)を拠出して、整備
に乗り出した。国が個人経営の山小
屋に直接補助金を出した最初の例と
いう意味でも画期的と言われている。
一方、地方公共団体でもいろいろ
な動きがある。静岡県では、自らが
事務局となって富士山トイレ研究会
を発足させ、杉チップトイレの実証
試験やバキュームカーによる屎運
搬の実験などを試みている。山梨県
でも北岳大樺沢に杉チップトイレを
設置するとともに、山岳トイレマニ
ュアル(仮称)の策定を検討するな
どソフト面にも力を入れている。長
野県でも横尾にTSSシステムトイ
レを設置している。また、長野県下
では、茅野市や長谷村でも八ヶ岳や
千丈の小屋にエコ・トイレを積極的
に導入している。

各山城の山小屋関係者も、独自に
または前述の行政の動きと連携して
改善に乗り出している。例えば、北
アルプスの槍ヶ岳では、槍沢ロッジ
は独自にTSS法のトイレを設置す
る一方で、肩の小屋は前記環境庁の
補助金を得て、同じ手法のトイレを
設置工事中である。ところで、山岳
トイレの大きな問題の一つに、維持
管理の難しさ(労働負担と費用)が
指摘されているが、前者については

立地条件別し尿処理(雑排水処理)とトータルシステム



FAT法: し尿をろ過し、ばっ気処理した後、その処理水をトレンチを用いて土壌浸透処理する方法。

SAT法: し尿に微生物製剤を添加し、ばっ気処理した後、その処理水をトレンチを用いて土壌処理する方法。

山のトイレに関する各対処方法の特長と問題点

対処方法	特 長	問 題 点
(1) 入山規制・入山料の徴収	環境負荷の軽減には有効	合意形成が必要である(特に生計を立てている業者などの理解)
(2) し尿の持ち帰り	全面的に実施され、完全に守られれば抜本的解決になり得る	合意形成が必要である トイレの構造を改修する必要がある 麓での受け入れと処理対策が必要となる
(3) し尿の搬出 (ヘリコプター、パイプライン、バキュームカーなど)	理想的にできれば抜本的解決になり得る	コストが高つく 気象条件などによっては技術的に問題がある 麓での受け入れと処理対策が必要となる し尿の軽量化・小容量化が必要である 異物混入防止や紙の分別など利用者のマナーと協力が <u>必要である</u>
(4) 環境に優しいトイレの設置	それぞれの立地条件にあった処理方式を採用することによって完全な解決(自己完結型)または相当の環境負荷軽減(非完結型)になる	方式によっては建設コストが高つく 維持管理が必要である(コストを含めて) 使用実績が少ないので技術的問題が解決済みか不明な点がある 異物混入防止や紙の分別など利用者のマナーと協力が <u>必要である</u>
(5) その他 (トイレ未設置の山域など)		登山者のマナーにより、出来るだけ環境負荷を軽減することが唯一の拠り所となる(麓で出来るだけ用を済ませ、やむを得ず用を足すときは、その場所や水に溶ける紙の使用、土に埋めるなどの最低限のマナーを守る必要がある)



し尿の放流によってできた白い筋 撮影・畔柳直美

述べてみたい。
(1)と(2)を主張される方もかなり多いが、トイレ問題の全面的解決を求めて実施するのはわが国の現状では難しいと思われる。むしろ(1)については、環境負荷から

山小屋の果たす役割は極めて重要である。
五、解決へ向けての登山者の役割
以上のように、行政、多くの山小屋が改善への動きを見せているが、この問題を解決していくためには、当事者である登山者を抜きには考えられない。しかし、登山者の立場か

らの運動としては、ごく一部でし尿の持ち帰りや紙の分別の提案が行われている程度である。
トイレ問題に関する多くの議論をもとに、各対処法とその問題点を整理して左上の表に示す(特に登山者の果たすべき役割と責任にアンダーライン)。以下に筆者の私見を交えて、登山者の果たすべき役割について

みて許容できる範囲を(3)(4)の方法とのバランスで検討するのが現実的と思われる。その点で、尾瀬が今後どのような動きを示すか注目される。現在の検討の主眼は(3)と(4)であるが、登山者として次のような点での協力が必要不可欠である。

六、まとめ
当するであろう。自然の浄化作用で済む範疇であれば、登山者のマナーで十分対応できるわけである。その点からも最低限のマナーを徹底する必要がある。

一つは、異物混入の防止である。異物で多いのは、ティッシュペーパーを包むビニール袋、生理用品などで、中には下着まで捨てている例もある。二つ目は、合併浄化槽以外では、紙の分別を徹底して行うことが必要である。第三には、維持管理に要する費用の少なくとも一部は登山者が負担することである。チップ制の実施例では、一人当たり約三十円という結果が報告されている。宿泊者は別として、トイレの利用に際しては、チップ制にしる。一人当たり

以上の内容を要約すると、次の通りである。

①山のトイレ問題は、立地条件・コストなどを考慮して、それぞれの山域、山小屋にあった方法を採用することが重要である。そのため、全ての方法に共通したマナーと、各方法に固有な守るべきマナーを明確にする必要がある。

②山のトイレは実質的に有料化(一回百円程度)にすべきである。

③各山域または各山小屋ごとのトイレ情報を、山岳雑誌・山のガイドブックや地図はもとより、一般の新聞・テレビなどのマスコミを通して広く周知する必要がある。

と、ところで、日本山岳会でも、科学委員会と自然保護委員会共催で、十一月二十五日(土)に「登山者の立場から山のトイレ問題を考える」シンポジウムを開催する。当日は、環境庁・山小屋経営者をはじめ、登山関係者によるパネルディスカッションを計画している。詳細は、来月号に掲載する予定である。

第四十二回有志閑談会

今年も涵徳亭(小石川後樂園)で開催

六月十日(土)、小雨にけむる小石川後樂園の涵徳亭で、恒例の有志閑談会が開催された。

会員有志が清談し合うこの有志閑談会は今年で四十二回目、ここにまたまた伝統と歴史を重ねた。世話役



雨の涵徳亭に集う28名の有志

は前回同様の中川武会員と女性はず年までの堀嘉世子会員に代わって三上智津子会員。まず、世話人の気配りの出席者名簿と四十七名におよぶ欠席者の消息が配布された。それによれば出席者は大塚会長をはじめ名誉会員各氏を中心に二十八名、午後一時過ぎよりほぼ三時間にわたって和気あいあいの懇談が続けられた。

会の中川会員の名司会によって開会された。中川会員の説明によれば、例年は会の冒頭に当たって、数名の方々を指名して順番にお話をしていたが、今年は談話は一人に絞り、あとは遠方からの会員もあり閑談の時間に当てる由、そして特に「私的な立場」ということで大塚会長を指名した。

ちなみに「閑談」とは岩波書店の国語辞典によれば「ひまつぶしのむだばなし」「当面の問題と直接関係のない話」とある。閑談会も原点に返ったことになろうか。

指名された大塚会長は役職を離れ、山にかかわる自己紹介といった座談をされた。

その概要は「富士山が見える学校」

に学び、山への憧れが生まれ、以後、明大山岳部・炉辺会のこと、兵役時代(見習い士官、そして戦後のマナスル、エベレストのこと、さらには日山協発足の経緯にちなむ松方さんの思い出など、氏の山への哲学も含め、内容は極めて多岐にわたったが、その輝かしい山歴にもかかわらず常に「強い幸運に恵まれ」と謙虚にしかも格調高い、聞く人に感動を呼ぶものだった。

次いで乾杯の音頭は織内名誉会員。戦前の閑談会の伝統について若干触れられた。この明治生まれの最長老を囲んで勇ましく乾杯!

そのあとは、例年とはやや趣を異

にして会場の雰囲気は一転、並べられた素晴らしいご馳走と美酒を酌みながらのなごやかな懇談となった。部屋に掲げられた扁額は「涵徳揚光」と墨痕鮮やかな由緒ある平沼驥一郎の揮毫と、いかにも格調高き閑談会の場にふさわしい。時間は十分にあった。しかしいつしか席を立ち談笑の輪となり、山談義にふけり、まさに時の経つのを忘れさせた。

あいにくの梅雨時、例年行う庭の散策はなし。窓越しに緑したたる後樂園の名園を眺めながら、午後四時、山村正光会員による記念撮影となつて、名残惜しくも閉会となった。

(小倉 厚)

●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円(税込)

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

●深田クラブ編●

深田久弥の研究

読み、歩き、書いた

飯島斉 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円(税込)

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社

東京都北区滝野川 7-6-13

電話・FAX 03(3915)8110

報告

REPORT
8月

海外連絡委員会

ドイツ山岳会シュューベルト
氏の講演と日本山岳会

五月十三日、東京の日本青年館で日本勤労者山岳連盟主催のドイツ山岳会ピット・シュューベルト氏の講演を聞く機会を得た。創設四十周年を記念する会の行事として、事前の準備とPRもよく、八百人近くが来場し満席の状態であった。

講師ピット・シュューベルト氏は『生と死の分岐点(山の遭難に学ぶ安全と危険)』の著者で、多くの岳人はご存知のことかと思う。氏は一九七六年にアンナプルナIV峰南壁の登頂に成功、ドイツ人としては初めてアルプス三大北壁登攀にも成功している。登山者の視点で厳しく登山用具の安全性をテストし、山岳事故の防止に長年携わっている学者でもある。

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

取り組む姿勢も素晴らしいが、私が感嘆したのはこの活動を支えるドイツ山岳会の組織基盤である。以前より日本の山岳団体と違うことは聞き及んでいたが、当日の講演で出た具体的な数字はその差を如実に表していた。

ドイツ山岳会は会員数六十二万人(日本山岳会は五千九百七十二人、平成十二年六月十二日現在)、年間予算額は三十一億円(日本山岳会は八千六百七十八万四千円、平成十二年度予算)、当然遭難防止のための技術講習費、登山道具の安全面のチェックや研究に使われる予算も大きい。もともとワンダーフォーゲルの発祥国であり国民の登山に対する親近感、関心度の高い国である。会が自前で管理する山小屋は約三百五十もあり、老若男女は年間五千円ほどで会員になれば、小屋利用の料金割引や山岳保険など会費に見合う特典を得ること

ができるせいか、七、八歳の子どもから入会し、年若い会員はほとんど退会することはないという。

振り返って当会はどうであろうか？ 会員数は六千人になろうとしているが、平均年齢は今や五十九歳である。日本社会全体が高齢化を迎えているのだから、日本山岳会に限らずいろいろな団体は平均年齢が高くなるのは当然である。しかし、先日この会員の年齢構成を見て驚いた。三十歳未満の会員がわずか六十九名で全会員数の一・二パーセントに過ぎないからである。大学山岳部などの団体会員もいるから、実態数としての若手会員はもっと多いのであるが、大学卒業後は個人として会員にならないのだろう。

今年で設立九十五年になるが九十五歳以上は十四名、うち百歳を超える会員は四名おられる。最高齢は百一歳。スポーツ団体でこれだけの高齢者をメンバーとしていることは喜ばしいことではあるが、次代を背負う若者が入らない(入りにくい)会は、組織として新陳代謝のできない問題を抱えている。

私は何もこれから日本山岳会はドイツ山岳会のようになれば、と提案しているわけではない。日本山岳会は日本山岳会としての独自の歴史と伝統をもっているわけである。しか

しオールド・アンド・エバーニュー、来るべき時代に対応した活動方針を打ち立てていくべきではないかと思う。国柄や文化背景は異なるが、先ごろ来日したアメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集長ベックウィズ氏(年齢なんと三十一歳)によると、アメリカ山岳会では年々若手会員が増加しているという。理由は環境団体による国内の登山規制が厳しくなり、登山者自身が自分たちの活動フィールドを確保するため山岳会への入会数が増加しているのだという。

今、新しい世紀に向け、時代に合わせた活動が必要ではなからうか。そのためには大胆な改革も必要かもしれない。サロンの山岳クラブで留まるのも選択肢かもしれないが、社団法人としての活動を認知されている以上、当会は社会性ある活動を今以上に積極的に行うべき、と考える。先ほど述べた会員についてであるが、おそらく多くの会員は日本山岳会とは別に自分たちの所属する山岳会があり、それぞれの山岳会は独自の目的、実績、地域性などを持っているだろうし、また個人個人においては実社会において多方面の活躍をされ、学識レベルも高いと推察される。

このような会員構成の日本山岳会は潜在的な総合力は相当高いと思う。

ひとくちインターネット HPとEメールの違い

インターネット小委員会

ホームページ (HP) とEメールの違いは、テレビと手紙の違いのようなものだ。

Eメールは手紙のように文章などをやりとりするもので、ホームページはだれかが作ったものを見る、もしくは作って見せるものである。

iモードという携帯電話はパソコンの代わりにホームページ (iモード用に作ったもの) を見ることができたり、Eメールでやりとりもできるが、もちろん機能は格段に落ちる。(N)

六月二十六日、十九時より平成十二年度の「委員会・同好会連絡会議」が本会会議室において開催された。これは近年の会員数増加に伴うルール利用上のさまざまな問題点やトラブルの解消を図るために、昨年度から総務委員会主催として定例化されたものである。

西村総務担当常務理事による趣旨

委員会・同好会連絡会議

総務委員会

このバックグラウンドを生かし、昨今の環境問題、青少年の犯罪、情報化社会、そんな現代の社会的テーマにも目を向け、日本山岳会が登山活動を通して社会に対して何か役立ててゆく場を求めていくべきではなからうか。

(坂井広志)

説明に始まり、以下中川幸平担当委員により昨年度に若干の変更修正が加筆された「ルール利用の手引き」に関する説明が行われた。

次いで、高原総務担当理事の提案により、各「同期会」の活動状況の説明を踏まえて、その体質がはらむ問題点や今後望まれるあり方についての活発な意見の交換が行われた。今回は問題提起の場を提供するに留まったが、会員同士で「山へ行きたい」という欲求を安易に「同期会」、ひいては本会に依存的に求めるのではなく、主体的な姿勢で既存の同好会サークルへの積極的な参加を図ってもらいたいということや、その一方で同好会の加入状況の紹介や勧誘PRに関する検討を加えるなど、今後大いに議論を重ねてほしいとの方向で、二十時三十分散会した。

(畠中 丘)

アルバータ二〇〇〇実行委員会

カナダ大使館で歓送会

六月二十八日、カナダ大使公邸において同大使主催のアルバータ登山隊歓送会が行われた。カナダ側はレナード・J・エドワード大使夫妻、コモ公使、広報担当の参事官バーネットさん、アルバータ州政府駐日代表のクラークさん、カナダ政府観光局のテレクフッドさんなどが参加。日本側は登山隊の熊崎、竹内、実行委員長の大森以下増山、芳賀、黒川などが出席した。

エドワード大使はこの合同登山が両国の文化交流に大きな意味を持つことを強調し、登山隊の成功を祈念すると述べた。日本とカナダの外交関係樹立は七十年前、今回のアルバータ二〇〇〇は七十五周年であつて、ここのほうが兄貴分であるなどの冗談も交わされ、打ち解けた雰囲気の中で懇談が行われた。(増山 茂)

図書管理小委員会

北海道支部へ図書寄託

北海道支部は創立三十周年に当たってルームを新設した。そこで本会図書室としては北海道支部会員の便



北海道支部のルームに納まった寄託図書と大塚会長

宜のために、所蔵している重複本を支部ルームの図書充実の一助として北海道支部に寄託することとした。寄託図書は、和書二百十三冊、洋書百十二冊である。洋書のうちには稀覯な古典も含まれているので、支部会員には喜んでいただけたと思う。(水野 勉)

フィルムビデオ委員会

寄贈・新購入のビデオ作品

当委員会ではビデオライブラリーの充実を図っています。トレッキングを楽しみたい方、登山を一層楽しみたい方のご利用をお待ちしていま

す。

利用方法は、ビデオラック常備のノートに所定の事項を記入し、ルームでご覧ください。原則として持ち出しはお断りします。特例として地方支部などでご利用の場合は、委員会で許可を得てください。

寄贈・東京福原フィルムス

「こころの名山・日本霊山紀行」

全十巻 一巻・六十分

日本全国に数ある霊山の中から、深遠で厳かな魅力を持つ五十の山(利尻山から宇良部岳まで)を紹介、こころの旅を味わう映像です。

新規購入

企画・発売 山と溪谷社

制作 東京福原フィルムス

ネパール・ヒマラヤ

全三巻 一巻・五十分

①「エベレスト・トレッキング」

②「アンナプルナ・トレッキング」

③「ランタン・トレッキング」

ヨーロッパ・アルプス

全四巻 一巻・五十分

①「マッターホルン展望トレッキング」

②「ツェルマット周辺」

③「アイガー展望トレッキング」

④「モン・ブラン展望トレッキング」

⑤「シャモニー周辺」

⑥「チロル展望トレッキング」

⑦「インスブルック周辺」

ビデオ・登山学校

全十巻 一巻・四十分

市毛良枝さんと一緒に登山技術を基礎から学ぶビデオシリーズ

①山の装備の選び方・使い方

②山の歩き方

③山の泊まり方

④山で遭難しないために

⑤山の天気を知る

⑥山の地図を読む

⑦沢登りを楽しむ

⑧雪山を楽しむ

⑨山を撮る

⑩花を楽しむ山登り

(羽田栄治)

海外連絡委員会

カザフスタン登山協会から招待

カザフスタン登山協会からの

Tiennan Alpine Summit (二〇〇〇年八月十五・二十二日)への招待が大塚会長、増山海外担当理事宛に送られてきた。当会からは宮崎紘一常務理事と松原理事が出席することと決定、先方に通知した。カザフスタン登山協会からは海外連絡委員

会宛にアラトウ山脈での岩雪登攀の訓練キャンプ地に関する提案、テン

ション山脈の新しい山やルートに関する提案も寄せられている。日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟からも

各二名が参加、H A T・Jからも一名が参加の予定。報道関係者も参加すると思われる。(増山 茂)

自然保護委員会

白神の植林に参加して

青森支部が行っている白神の植林に参加しました。好天に恵まれ、人気がない白神の山中で過ごした六月九日からの四日間は、久しぶりに本格的な山の気配を満喫しました。

作業は十五、六年もののスキの植林地整備からはじまりました。健やかに育っているスギもありますが、林床は荒れています。まずこの十五年以上の間に跋扈したウツギ、ヤマブドウ、チシマザサを林床から取り除きました。次に、有用樹でも匍匐してしまつて成樹になることを期待できないものも処理しました。スギ、キハダ等が多かったように思います。

ここまでするのには一日仕事で、五メートル×一五メートル程度の林床だけしか整備できません。個人的な思い入れもあって、ひん曲がっていてもホオノキなどは残しておきました。その間にチシマザサのタケノコを採ってみたり、匍匐したキハダを処理して樹皮の下の黄色い部分を剥いてみたりしたのも白神ならではの

です。

昨年林床を整備した場所にブナを植えました。林道で根づいていた四、五年ものの稚樹を掘り起こして移植しました。ただこのまま黙って放置すると、周りから種子が入ってきて生育したものがその辺りに種子をばら撒くまで、七十、八十年くらいかかってしまうでしょう。そのあたりがブナの森になるには五百、一千年の年月がかかるかもしれません。

今回移植したブナが活着すると、百年くらい経てば一面のブナ林になることも期待できそうです。森林管理事務所の指導もあって、有用樹でしっかりしているものは残すことになっていきます。スギ、キハダ、ホオノキ、ウダイカンバ、ハリノキなどが目につきました。私が担当した辺りはやたらキハダが多かった。

一日はエクスカッションで、クマゲラの森まで遠征しました。そこではブナの巨木が緩やかな地滑り地形全体を占拠しています。夏のはしりの強い日差しの中で、この森には冷たい風が渡ってきました。同じ道を戻す途中、サルの大群の出迎えを受け、しばしじつと向き合ってお互いを観察しあうのも面白いものです。そんな中で生きてきた人たちがいて、白神の環境を利用しながらその環境を護ってきたのです。決して高山で

はないけれども、山＝森のさわやかさや気持ちのよさがあります。環境と人とのつながりを感じながら、人跡稀なこのような素晴らしい森の生活が楽しめる、白神の植林にはそんな喜びを感じました。

最後の日にテントを撤収しながら、クマゲラだという声に見上げると、赤い帽子をつけた本州の希少種がほろほろと鳴いて、一瞬、飛んでゆくのが見えました。
(大船武彦)

丹水会例会

大室山、鐘撞山行

第三十八回丹水会例会は五月二十七日、四十五名が参加し、神奈川県藤野町青根の鶴屋旅館で行われた。今回は恒例の講義に代え「集団登山」「ゴミ、トイレ問題」「動植物とのつきあい」の三テーマに分かれて座談を行った。翌日は大室山と鐘撞山の二コースで山行をした。

大室山コースには十八名が参加。全員が初めてたどる日陰沢新道コースを登路に選び、神ノ川ヒュッテのすぐ上の案内板に導かれて右の登山道に入る。明け方まで降っていた雨で道が滑るのを心配したが、まあまあ状態であった。ところどころには藤野山岳会の標識があり、作業道

に迷い込むのを防いでくれる。ゆつくりと単調なヒノキ林の中を二時間余で鐘撞山からの稜線に合し、尾根道となる。

尾根歩きになつて間もなくヤマシヤクヤクの花に出あい、皆でその清楚な姿に歓声をあげた。オオカメノキの白い花、トウゴクミツバツツジの赤紫の花やマメザクラのピンクの花が出てくると、ようやく大室山頂上も近い。皆、額に汗を浮かべて山頂に勢ぞろい。ここでゆつくり昼食をとり、下山は犬越路へと下りた。この道で待望のシロヤシオツツジに出あった。ミツバツツジの赤紫とシロヤシオツツジが新緑に混じる様は疲れを癒してくれる。犬越路で西丹沢に下る四人と別れ、大分疲れてきた脚をいたわりながら、神ノ川ヒュッテには十五時を少し過ぎた頃に着いた。

鐘撞山コースは二十名、大室山はよく登ったけれど鐘撞山はめったにない機会だから」と参加した会員もいた。木漏れ日の中、フタリシズカが咲く植林地帯を急登、長く続く間伐材の階段を登りきると釣鐘がある山頂に着いた。花盛りのミズキの木陰で早めの昼の休憩をとり、帰りは東北方向に下る稜線の急斜面に踏み跡を探し藪漕ぎをした。短時間ではあったが、下山も十分楽しめた。

両コースとも心地よく下山、それぞれ秋の再会を約して解散した。
(渡邊玉枝・國見ゆみ子)

二火会山行

石砂山・石老山へ

昨日からの雨も上がり、五月二十一日、中央線藤野駅に二十名が集合。駅前からタクシードで菅井小学校の先まで入る。身支度を整え、自己紹介のあと出発。道の両側には色とりどりの花が咲き、目を楽しませてくれる。しばらく山道の道を進み、伏馬田城の解説板がある分岐を左に入る。その先から東海道自然歩道の山道へ。もうすっかり新緑から深緑に変わった樹々の緑はまぶしくくらいに光っている。

石砂山までの登りはキツイわけではないが、登りはじめとしては一汗かくまで調子が出てこない。時々木漏れ日が差す中、ワラビ採りをしながらのんびりと歩く。階段状の急斜面を登りきったところが石砂山。頂は狭いが展望はよい。

休憩ののち石老山に向かう。このあたり一帯はギフチョウの生息地と記した案内板がところどころにあった。石老山へは、いったん篠原の集落到に急下降し、県道をたどる。県道

を離れ尾根に取りつく前に、地元の方のご厚意で庭先を借り昼食、食後は野点を楽しむ。

雑木林の尾根は石砂山と違い急な登りが続く。最後の階段状の急斜面を登りきったところが石老山頂上であった。桜の木が多く、花の咲く頃に登ってみたい。人のいない山頂でのんびりとまた野点を楽しむ。

下山は顕鏡寺コースを下る。眼下に相模湖を見下ろす見晴台を過ぎ、やがて顕鏡寺に着く。樹齢四百年、樹高三〇メートルの蛇木杉が素晴らしい。バス停のある石老山入口まで車道を歩き、中央線相模湖駅に出る。
(矢作郁子)

日帰りからキリマンジャロ、マッターホルンまで	
全国ネットの山旅専門店! 安全で快適な山旅を。中高年からお一人様までサポートします。各コース経験豊富なツアーリーダー同行で安心。 おすすめオリジナルプラン手配OK 人気の山旅スタイル。気軽にお問合せください。	2000年度カタログ 国内246コース、海外111コース、自然に学ぶ旅36コースの総合カタログ(全134ページ)をお送ります。 各地発着それぞれのカタログをご用意しました。送付無料。
アミューストラベル株式会社 〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-22-2 新宿サンエービルB1 ☎03(5325)1256 FAX03(5325)1258 大原06(6456)3366 名古屋052(588)5617 横浜092(414)5566 広島082(502)2525 北海道アイダイヤル0120(802)514(東京へ転送)	



北陸三支部の30余名が集い懇親会

石川支部

北陸三支部合同登山

山はまさに萌黄色、新緑の美しい
鈴ヶ岳(二一七五メートル)でした。

JAC
支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況を
リポートします。

第九回を迎えた富山、福井、石川三支部の合同登山は石川支部の担当で、石川県小松市の鈴ヶ岳で行われました。

五月十三日(土)、小松市の「大杉青年の家」に北陸三支部の会員三十余名が集合、午後六時三十分より恒例の懇親会を開始。例年より残雪の多い山の話に花が咲き、皆さんよく飲みました。合同登山もしっかり定着した感じがします。

翌十四日(日)、昨夜の懇親会に参加できなかった会員も加わり、大杉谷駐車場から登山開始。天候は今ひとつでしたが、樹々の新緑は素晴らしく、汗よりも春風の心地よさに皆快適なピッチでした。途中、ヌギ谷原には、石川支部の西出会員が主宰する「鈴ヶ岳を守る会」の人たちが小屋を建設中、ここからのやや急な尾根でもう一汗。登山道を開き、階段やロープを設置した「守る会」の方々の努力に頭の下がる思いです。

開けた山頂までの二時間間、残念ながら白山は雲の中でしたが、見下ろす樹海は優しい色合いの中に残雪が広がり、しっとりとした春山を満喫しました。元気の余る会員はさらに稜線続きの大白山まで往復。降り出した雨に追い立てられ急ぎ下山。来年の福井での再会、山行を約して解散しました。

今回はとくに関本、西出両会員に宿泊、懇親会、山行とすべてお世話になりました。どうもありがとうございました。(中川博人)

信濃支部

第五十四回ウエストン祭

例年のことながら、ウエストン祭の一番の悩みは雨である。早ければこの時期、梅雨のはしりが見られる年もあるからである。

六月三日、三月のドカ雪が未だ大分残っており、ウエストン祭の徳本峠越えを学校集団登山としている地元安曇小中学校が中止した今年、支部独自の二度にわたる偵察と登山道修復など万全を期して、記念山行は例年どおり実施された。しかし残雪の多さが一般参加者の不安を誘い、いつもの約半分二百名ぐらいの参加しか得られなかったのは残念であった。また、毎年早朝から湯茶の接待をしてくださっている地元の人々の皆さんには、ウエストン祭が村の行事になった感があるとはいえず、頭の下がる思いである。

安曇村村長、支部長挨拶ののち午前六時出発、上高地まで二五キロ、九十分間の行程である。途中少々雨にあったが、心配したスリップ事故もなく、夕方全員無事上高地に到着、一安心。

六月四日、芽吹きは少々遅れ気味だが雨上がりの好天の中、大塚会長はじめ多数の来賓と広場いっぱい参加者が集い、碑前祭が盛大に行われた。

一連のセレモニー進行の中、日本山岳会が昭和十二年ウエストンを顕彰するために制作されたレリーフをこの場所に取りつけた松本の石工・金子栄蔵、光雄親子の子孫が紹介された。幾多の受難の歴史の跡を残して今があるのは、先人たちの並々ならぬ努力があったこそである。

ウエストンが属していた英国聖公会のウイリアムズ司教が創設した立教聖公会神学院の教授も勤めたことがあり、現在立教学院長の塚田理氏の「ウエストンがもたらした文化としての登山」と題して行われた記念講演は、聖学者として、また山登りをしない立場からのウエストンを見た興味深いお話であった。

式典終了。二〇〇〇年の幕開け、今年も安全で楽しい登山であってほしいものである。(中野和郎)

福井支部

夜叉ヶ池山清掃登山

六月二十五日の天気予報は雨。朝起きて外を見ると曇り空であったが、



拾い集めたゴミの袋を下げ、夜叉ヶ池で記念撮影

雨は降っていない。会員七名の参加を得て車二台に分乗し、一路北陸道を今庄インターへ、広野ダムを経て登山口に向かう。駐車場に車を置いて、各自、木カマやゴミ拾い用の火箸、県の自然保護課から分けてもらったゴミ袋を持ち、出発する。

谷沿いの道はゴミもなく一見きれいだが、見えないところに缶などが捨ててあり、こまめに拾う。夜叉ヶ池までの道は今庄町で整備しており、以前に較べると格段に歩きやすい。

天気も何とか持ちそうである。池に到着すると、一組の登山者が食事をしている。夜叉ヶ池のほうにニッコウキスゲの黄色い花が見られる。休憩もそこそこ出発。稜線で京都からきた十人くらいのグループに出会う。駐車場にあった京都ナンバー

の人たちだ。口々に「花が満開でいいですね」という。

ゴミを拾いながら、稜線では笹藪を刈り、また写真を撮りながら頂上を目指す。イブキトラノオの白色、ニッコウキスゲの黄色、アザミの紫色の群落に、今日くることができた喜びを感じ、急坂を頂上に向かう。斜面いっぱいの花畑に至福のひとつきを満喫しながら！

梅雨時のこの季節が環境月間になつており、雨は覚悟の上だったが曇り空で蒸し暑く、汗びっしょりだった。稜線上の美濃から吹き上げる涼風で衣服も乾きはじめた。頂上で早い昼食に舌鼓、ご馳走を分け合い、おしゃべりをし、楽しく過ごす。

山頂を後にして、ニッコウキスゲを前面に入れ、ハート型の夜叉ヶ池をカメラに収める。池の周りではたくさんの方が食事をしていた。ゴミの持ち帰りをお願いしながら歩く。夜叉ヶ池をバックにゴミ袋を下げて記念撮影。下りはゴミを一つ残さず回収することを念じ、途中ブナ林やトチの太木、夜叉ヶ池を鑑賞しながら歩く。今日一日の清掃登山が効果的であったことに感謝！

今庄のやすらぎ温泉365で汗を流し、そばを食べて、参加してくれた会員に感謝しながら無事帰福した。

(宮本数男)

越後支部

越後の隠れた名山、馬ノ髪山

越後の山々は、豊富な残雪で高山植物の繁茂が旺盛である。それを求めて全国から多くの登山者が訪れるが、中でも中高年登山者の数が多い。越後の百名山、三百名山ともなると週末は大いに賑わう。飯豊山の近くに住んでいながら近年とんとご無沙汰ばかりの私も、久しぶりに飯豊山を訪れて驚いた。三十年前はこの山を縦走しても登山者とすれ違うことが稀であったが、今は年配の登山者と頻繁に行き会う。当時は四十歳くらいの方が年配者に見えて、元氣な人だなあと感じたものであったが、そんな越後の山にも、昔に返ったのかと錯覚しそうな山がまだ残っている。アブローチが長い、登山道がないなどの理由で取り残され、今まで静寂を保ってきたのである。最近では林道の開発が進み、思わぬ山へ導いてもらえるようになった。

ここに紹介する馬ノ髪山(七五七メートル)は、綱木集落からしつかりした山道もなく、特定の人だけの領域だったのだが、林野庁の事業で舗装林道が建設され、登山口までマイカー乗り入れも可能になった。

登山口から眺める馬ノ髪山は急峻に鋭く鋭りがあり、登頂欲をそそる

山である。赤茶けた花崗岩の明るい沢筋を廻り、谷間に咲く可憐なヒメサユリに接しながら約一キロ進み、赤い布切れに誘われて右側の尾根に取りつく。ここから登山道は明確である。急登の連続だがロープが張つてあり、よく整備されていて不安はない。尾根道は杉、松、五葉松の林で快適に登ることができる。七合目付近よりブナが現れ、季節によっては花街道を形成する。とくに春はイワカガミが一斉に咲き華やかである。急登の連続は九合目で終わり、扇ノ平からは平坦で汗を拭き拭き頂上に達する。頂上は二等三角点が設置されており、眺望は素晴らしい。萩場山をはじめ二王子岳、飯豊連峰の雄姿が間近に望まれる。南に目を移せば、守門岳、越後駒が遠望できる。ただし、この山一帯はツキノワグマの生息密度が濃く、用心に越したことはない。

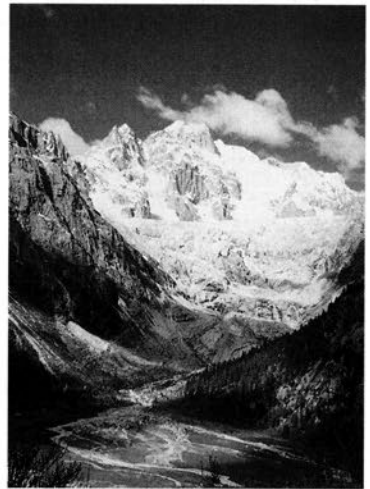
登山道は地元綱木集落の馬ノ髪山愛好者によって管理されている。国土地理院発行の五万分の一地形図上にも登山道はなく、また、今までの山岳文献にも見当たらない。

馬ノ髪山は登山ブームとは縁遠く、それで静かに自然の美しさを保ってきたのだろう。いつまでも心ある登山者のみが訪れることができる自然の聖地であってほしい。(樋口宗二)

海外の山

2002年「国際山岳年」を知っていますか？

江本嘉伸



ミレニアムとか二十一世紀とか何かと時代を画する、「エポックメイキングな」事柄が展開するこの一、二年である。山岳の世界もその例外ではない。

七月十二、十三の両日、東京・青山の国連大学で、「第一回国連大学山岳問題に関するワーキング・グループ・ミーティング」が開かれた。国連大学環境・開発問題担当学術審議官のリボル・ヤンスキーをコーディネーターに、スイスベルン大学からハンス・フルニ、ウルス・ウィースマンの二人の教授、中国の梁洛輝・国連大学コーディネーター（人口・土地・環境担当）、日本側から小野有五・北海道大教授、渡辺悌二・同助教授（二人とも日本山岳会員でもある）、環境庁自然保護局の専門官らが参加した。筆者もオブザーバーの立場で出席させてもらった。

どんなことが話しあわれたかを言う前に、このミーティングの前提となっている基本的な事柄について質問。

国連が二〇〇二年を「国際山岳年」と決めていることを日本の山岳関係者の何人ほどが知っているだろうか？知っているとしたらその年、日本の登山界はどんなことをすればいいのか、どこかで何かを企画しているのだろうか？

正直、筆者も知らなかった一人である。あわてて調べたら「UN International Year of the Mountains」といい、一九九八年十一月の国連総会で宣言されていた。「持続可能な山岳開発」が中心テーマで、国連大学は「グローバル山岳パートナーシップ計画」を掲げ、積極的に山岳年計画に参入したというわけである。といっても地球上山岳地域は広大

に過ぎる。ベルン大学はアフリカのエチオピアや中央アジアのキルギスで、北大グループはネパール・ヒマラヤのカンチェンジュンガ地域でそれぞれ地質やエコツーリズムに関するフィールド調査を進めており、それらを軸に他の諸国の調査グループと連携しつつ、今後の展開をはかる趣旨と見うけられた。

研究者たちがスライドやチャートを示して説明する世界山岳状況の一端、あるいはベルン大学が責任編集した「世界の山々」の美しい冊子の内容は、興味深かった。どんな地域でどんなプロジェクトを進めるか、調査のための経費をどう生み出すかなどについて熱心に話し合われた。

二日間の議論を通じて考えさせられたのは、どうして日本の登山界がこんな大きなことを知らないでいた（と、推測する）のか、という驚きと、今だからこそしっかり捉えておきたい「山岳」というテーマの広さである。

日本では登山という行為そのものへの関心が優先することが多く、山岳環境などというと、まあ専門家にまかせておけ、という気分が一般的だ。しかし、山に登ることだけ、またはヒマラヤに「遠足」に行くことだけを重視しては、もったいない時代なのではないか。

「持続可能な (sustainable) 山岳開発」とはいかに堅苦しい日本語だが、要は、踏み荒らされ、荒廃してしまわないような山々と、その山麓の住人たちの付き合い方をいかに学び、実践するかだろう。それらをテーマにすることで新たな楽しみも見出せるのではないか。

以下は、日本山岳会が当面している問題に関する事柄である。

討議の最後に、日本の山岳関係者のネットワークの構築、「国際山岳年」での国内行事の実施と外国での行事の参加が提案された。ネットワークについては、山岳諸団体との連携のほか、日本山岳会総会で会長自身が言及したように、海外からの「片側通行」の情報への根強い不満がある。英語表現の問題（国連大学での議論も英語だった）がネックなのだが、登山の文化にかかわることだ。もうそんなことは言っていられない時期にきている。

国連大学は、教育機関ではないために、日本人には馴染みが薄い。しかし、せっかく世界で唯一東京に所在する国連の研究機関を活用しない手はない。スタートは遅れたが、この機会に日本の山岳界が大いに話し合ってもらいたい。及ばずながら筆者もお手伝いをするつもりだ。

二〇〇二年、何をしますか？

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

日中鉄道友好登山隊 崗則吾結峰に初登頂

草木陽一

日本鉄道山岳連盟はJR発足十周年を記念して、傘下各社山岳連盟が海外遠征を行ってきた。その掉尾を



中国甘肅省・崗則吾結峰の初登頂に成功

飾る日中鉄道友好登山隊が、一九九九年八月七日、未踏峰・崗則吾結峰(KANGZE GYAI 五八〇八メートル)の登頂に成功した。この山は、中国甘肅省北蒙古県内にある祁連山脈の一つ、疏勒南連峰の最高峰である(東経九七度四五分、北緯四三度七〇分)。

日本側の登山隊はJR西日本山岳連盟所属の社員を主力に東日本、四国、九州の各社員と医師、合計八名(内女性一名)で構成され、中国側・鉄道部火車頭登山協会の全面的な協力のもとに、六名の登山隊員と三十名に及ぶ支援隊で共同登山が行われた。

登山隊長は、チョモランマ中国人初登頂の国民的英雄・陳山氏であり、山の選定を初めとし、終始このプロジェクト推進に努力していただいた。敦煌指揮部には、同登山協会主席・

鄭炳軍氏、秘書長・憑子彬氏など錚々たる人たちが詰め、現地との無線連絡が定時に行われた。

本隊の派遣に先立ち、北京鉄道部における交渉のほか、一九九七年八月八十七日まで、JR西日本石山勝廣隊長ほか二名が偵察隊として入山した。当初の打ち合わせではラクダで二日間行進するという話もあり、ラクダの速度がそんなに速いのだろうかなど、心配事はたくさんあったが、人民軍のジープで二日間で踏破するなど、やはり事前調査の大切さを教えてくれた。またベテランの隊員が高山病で倒れるなど貴重な体験をすることとなった。

偵察の結果、四五五〇メートルのBCから直線距離八・五キロ、登山距離一二・一三キロ、ザイルフィックス三カ所・一二〇〇〜一三〇〇メートル、氷河入口のセラックでは梯子が必要など多くのことが明らかとなった。

計画ではC1を五〇〇〇メートル地点、C2を五四〇〇メートル地点に設営することとして、装備や食糧についても詳細な報告がなされた。

本隊の登頂によって、持参の高度計で頂上の標高は五五六〇メートルであることが判った。結局BCは四二〇〇メートル付近、ABCを四四〇〇メートル、C1を四九五〇メー

トルに設営して一気に頂上アタックに成功したことになる。

次に日本側登山隊長・石山勝廣の登頂報告を掲載する。

＊

先発隊の中国側隊員の羅申さん、日本側隊員の内山龍司、前田常雄、中山学の四名が平成十一年(一九九九年)八月八日八時四十分、初登頂に成功。続いて翌九日九時五十分、小林利樹、野口光二、前川義人、石山勝廣の後発隊四名が登頂し、予定していた全員が登頂できた。

まず、今回の未踏峰登頂成功の要因は中国側が準備してくれた車両、装備、支援スタッフが大変よかったこと。第二は野口医師による健康管理で、隊員が順調に高所順応ができたこと。第三は難関の氷河突破において小林、内山隊員らがルートを早期に開拓したこと。第四は稜線は風の強い時もあったが天候が全体的によかったこと。最後に、ABCにテントを設営した頃(八月三日頃)から、隊員がおのずと自分のすべきことがわかってきて、混成チームにもかかわらずチームワークがよくなってきたことがあげられる。

全員登頂という登山自体が容易だったと思われがちだが、深さ三〇〜四〇メートルはあるのかと思われるクレパスを百カ所程度通過したし、

下山の際には斜面が見えないほどの急傾斜もあり、後ろ向きにダブルアックスで下りた。

職域山岳会が登る山としては十分すぎるレベルであったと考える。全員無事で帰国できたことを、日本側隊長として何よりよかったと思う。

*

一九八一年、当時の国鉄山岳連盟が博格達峰（ボゴダ峰五四四五メートル）に遠征隊を派遣して以来の快挙が、日中鉄道の山男たちによって達成されたわけである。JR岳連では今後とも両国の友好登山が続くよう親善を深めているところである。

四月二十一・二十二日、岡山、鳥取の県境に位置する毛無山で行われたJR西日本山岳連盟の大会（約百七十名参加）に、郵主席を団長とする八名の火車頭登山協会訪日団が参加され、友好の輪をさらに深めることができた次第である。

第二回森の勉強会 芦生の森に五十三名が集う

鈴木美代

五月二十、二十一日、滋賀県朽木村朝日の森及び京都府美山町京大演習林（芦生の森）において、京都、関西、東海、三支部共催の表題の会



森の勉強に出発—朝日の森で 撮影・箕浦靖夫

が開催された。参加総数五十三名（京都七、関西十三、東海二十五、石川二、岐阜一、その他五名）と、前回は倍する大盛況だった。

日程は二十日午前中を座学とし、海老沢秀夫前朝日の森・森林環境研究所長の「森の形を読む」と題する講義、その後森林インストラクターの資格をもつ関西支部の磯部幸則会員の講演「私の登山と森林インストラクター」、大蔵喜福首都圏自然保護委員長からは首都圏の委員構成、二〇〇〇年度の自然保護活動、その支部活動とのかかわり及びJACの森に関する講話をうかがった。

午後からは朝日の森での野外学習（FS）、翌二十一日は朝から芦生の

森でのFSである。

また二十日の夕食後に、翌日の芦生の森のインストラクターも含めた今回の講師陣との質疑応答を行った。この席で、秋田から参加の藤原優太郎会員より、奥羽山地・和賀山塊の紹介があった。白神山地をしのぐ二万一千ヘクタールの原生度の高い森が残っているが、保護の網がかかっているのは十分の一以下で早急な対策が望まれるという。早速秋に出かけてみようという話が進行している。

また今回は、ジャーナリズム関係者として「山と溪谷」「岳人」各編集部より久保田賢次氏、鍛冶伸子氏が参加、東海支部員である中日新聞の石原俊洋氏は、早速この集いを翌日の記事にした。

■座学「森の形を読む」

講師の海老沢氏は、五月に東京に転勤されたが、この日のために駆けつけてくださった。朝日の森・芦生の森の、森の形（林相）を吉良竜夫博士が開発した、寒さの指数、暖かさの指数の理論と関連づけて話され、さらに冬の乾燥をいかにしのぐかという問題から積雪量の重要性に言及された。このような観点から、朝日の森はブナには暑すぎ、椎・檜には寒すぎる森となる。そこに成立するのが栗、コナラに杉、樅の混じる林である。このような森はかつては薪

炭材や堆肥用の落ち葉の採取地として里の生活と密接に関わっていた。明治二十四年当時の地形図を資料として配布していただいたが、この中で森と田の間に荒地のマークがある。これはホトラ山と呼ばれる草刈地で、水田の堆肥のために二年に一度草を刈り払って焼く。これがいわゆる「野」ではないか、という。なるほど山（森）と人里は「野」を介して有機的につながっていたのだ。やがて昭和三十年以降の化石燃料への転換、農業様式の変化の中で、これらの野は、一部は杉の植林地となり、そうでない部分は放置されてコナラの林となった。コナラは枝を切ってもまたそこから側枝が出るので、薪炭材としては最適である。しかし現在では木炭も使われなくなり、人と森との関わりは切れた。

昭和三十年代、森林経営には明確な目標があった。それが、皆伐と杉などの単一植栽による拡大造林、すなわち木材価値のある針葉樹の植林だったわけである。その問題点が明らかになってきた今、替るべき目標は見えていない。

講義内容はかなり高度な部分もあったが、ポイントが絞られて大変わかりやすかった。また参加者には事前に主催者から参考書二冊（菊沢喜八郎著「森林の生態」共立出版、八

山岳博物館散歩.....4

栃木県立博物館



当館は《栃木の自然と文化》を統一テーマとして、昭和57年(1982)10月に開館した総合博物館です。このたび大規模な展示替えを行い、平成11年4月10日にリニューアルオープンしました。

展示構成は次のとおりです。

- ① シンボル展示——エントランスホールにシンボルになる資料を展示(現在は宇都宮市内蓬葉町屋台)

- ② スロープ展示——72mのらせん状のスロープを利用し、日光地方の動植物の姿を、垂直分布に従い生態的に展示。
- ③ 展示室1——栃木県の地質時代から現代にいたるまでを年代順に展示。
- ④ 展示室2——身近な自然や地学・植物・動物を紹介した自然系常設展示、自然系・人文系の各種テーマ展、各種企画展を開設する展示室。

とくにスロープ展示では、参加体験コーナーを設けたりして、親子で楽しめるようになっています。

(普及資料課 阿部邦男)

栃木県立博物館

〒320-0865 宇都宮市睦町2-3

TEL: 028-634-1312

開館時間: 9:30~17:00

(入館は16:30まで)

休館日: 月曜日、祝日の翌日、年末年始、定期消毒期間

観覧料: 一般250円

田洋章著『木の見方楽しみ方』朝日選書が指示されていた。

■朝日の森、野外実習

昼食後、海老沢講師のほか、現森林環境研究所長の島田佳津比古氏にも講師をお願いし、二班に分かれて朝日の森のFSに出かけた。

汚水散布実験の説明を聞いた後、

まずは森林環境研究所の庭へ。ハンカチの木が花盛りであった。学習向けに人工的に設計された植栽を見た後、山へ入る。南斜面は北斜面に比べ概して単純な(樹種の少ない)森になる。尾根筋は谷に比べ水供給が悪い。ため樹種が少ない。今日の最高点は四〇〇メートルほどの通称熊の

平だが、その名のとおり梢にまで届きそうなきまじい熊剥ぎがあった。また今年の朝日の森はあちこちで笹が花をつけていた。昔ならばすわ天変地異と慌てるところだろうか。

■若生の森、野外実習

二十一日は心配された雨も上がり時々晴れ間も出る。海老沢インストラクター率いるA班が上谷、飯高恒夫、中根勇雄両インストラクターの率いるB班、C班は地蔵峠から中山、八甲山を経て下谷に向かった。地蔵峠も笹が花をつけていた。

飯高氏は、若生の価値は溪畔の植生から尾根上の植生まで原生度の高い樹種の変化が連続して残ることである、といわれる。中山から尾根に上がってゆくに従い変化する植物相がそれを裏付けている。沢沿いには桂、栃、サワグルミなど、尾根上では広葉樹に自生の杉、檜が混じる。朝日の森には一本しかないという本ブナもここでは結構見かけ、微妙に気候が違うことをうかがわせた。

杉の植林地では軒並み熊剥ぎの被害にあっており、杉の一斉植林における熊との共存の難しさを示している。しかし、ではどうするのか。京大農学部の実習は未だに杉の一斉植林だそう。植物多様性重視の教育はどうなっているのだろうか。檜や桂の保存木、レッドデータ

ツクに載るといいうヤシヤビシヤクなども見ることができ(場所はあえて言わない)楽しい一日であったが、考えさせられることも多かった。

若生の森については、特徴的な樹種や景観につき、東海支部坂井博一委員が中心になってスライドの集成を進めている。完成すれば支部の共有財産として活用する予定である。

■おわりに

十九日夜、支部の自然保護委員で、今後について協議した。この試みは継続することで意見が一致、次回(二〇〇一年秋とし、白山、大峰などを含めた候補地の案を練ることを申し合わせた。

北アルプス白馬連峰

ゆっくりとした登山をお楽しみください。

素泊り、山行中の継続駐車もできます。もとより駅、登山口等、送迎いたします。

和牛料理の宿



ひまわり

長野県北安曇郡白馬村神城22114-17
TEL (0261) 75-2292(代)
FAX (0261) 75-3284

ルートファイディング考・下

橋村一豊

■RFの六つの領域

一、登山道のある山（高く低級山岳など全域）

二、道のない樹林帯の山（中・低級山岳が主で、高山岳にはほとんど道がつけられている）

三、夏道のある山の冬期、スキー登山、残雪期（四〜六月）の山

四、沢登り

五、氷雪（氷稜、氷壁、氷瀑、氷河）

六、岩場（岩稜、岩壁、岩溝、地下洞窟）

気象状況によって順位が入れ替わることもあるが、技術的难度は一六の順になるだろう。五と六が入り交じった高高度の山岳が常に最も困難で、日本山岳会の会員といえども九〇パーセント以上はこれに適應できない。酸素とシェルパの助けを借りて登るエベレスト登山（クライミングではなくて歩いて登る山）などは別次元の領域である。

日本アルプスなど、二五〇〇メートル超の高山岳にはすべて登山道、

指導標、山小屋があつて、無雪期では最もRFの容易な山で、一に分類される。日本での登山の九〇パーセント見当はこの一の領域で行われている。二は大体名山ではない山が多いが、その中の何割かは三を凌ぐ手強い山もある。RFを好む登山者はこの領域か、四、五、六のバリエーションルートへ行く。

一から三まではリーダーが狼、虎クラスであれば、ついて行く者（フオロワー）は大した技術がなくても行けるが、四、五、六はバリエーションルートであるから、リーダーもフオロワーも、狙うルート相当の登山技術を身につけていないと、すぐ墜落死が起きる。RFは、登山技術の前提がなければ教習できず、またマンツーマンか、受講者一人に教師二人など労働集約的で濃密な指導が必要になる。

日本の冬山では気象が厳しく、積雪は深く、高山岳のバリエーションルートはヒマラヤの高峰や欧州アル

プスよりも困難な時もあり、狐クラスでは歯が立たない。

■指導法の探求

さて、RFの教習をどう構成し、体系づけたらよいのだろうか。以下に述べるのは日本山岳会東海支部におけるその試行の近況である。

一、前項一及び二の領域（登山道のある山と道のない樹林帯の山）での中高年初心者に対する講習山行。今年の四月から五月にかけて二本実施した。十一月に一本、来春にもう一本実施の予定。これらの結果を整理して指導法の要点を掴む。講習山行の概要は後述。

二、前項四〜六の領域での講習山行は、登山技術の前提条件や手厚い個人指導が必要なことから、事実上は大変困難である。もしこれをプロガイドに頼むとすれば、一人の受講者の負担は一行十万円を超えるだろう（私自身が元プロガイドだった経験からの試算）。それ故、この領域でのRF論は別の方法で追求したい。それは、四、五、六、それぞれの領域での達人を集めてRF論を展開し、指導のあり方を語ってもらう討論会を企画し、結論を得たいと思っている。

先にふれた中高年初心者に対する講習登山の概要を以下に記す。

構成

座学・二時間半（内容はRFに関する講話と作図の指導）

演習・日帰りまたは一泊二日の山行で、指導標皆無の山で道が途切れて自然道を歩くところもあり、ヤブコギも一部ある。（受講者を代わる代わるトツプに立たせ、指導者は指示を与えず後から行く。道迷いも訂正せず、トツプを行く受講者が気づいた時点で原点へ引き返し、迷った理由を指導者が解説、RFをやり直す。一人の指導者が受け持つ受講者は六名を上限とする）

復習会・二時間半（内容はアンケータの集計結果の解説と、全員が提出した作図を講評し改善を指導）

右のように、一般的な講習会に較べて構成は手厚い。三十五名の受講者を教習するために、六名の指導者が当たった。その指導者が道迷いをしたり（その可能性が十分ある山）、教える者によって言うことが違ったりしては困るので、演習登山に先立ち、私が他の五名を引率して全ルートをトレースし、注意点を説明するリーダー研修を行った。

他の一本も大体右と同じ構成で別の山で行った。二本の演習に参加した受講者は合計六十名、投入された指導者は合計十二名だった。これだけの指導者を動員できるところに、東海支部の層の厚い強みが発揮され

た。

質のよい指導者と並んで大切なのが演習登山をやるのに適した山を見つけておくことである。指導標が皆無であることが最も重要である。道はないほうがよいが、あっても細々とした貧弱なもの、あるいは廃道がよい。ヤブコギもしなければ日本の山のR Fとは言えない。しかしあまりエスカレートしてもいけない。恵那山の昔のルート(ウェストン)が登った恵那神社からの道)のように廃道化して久しく、背丈を越す笹の激ヤブによって一日では到底頂上に届かないような大消耗の山、間違つて下ると悪場の洞や連瀑によって墜落死の恐れがある谷を秘めたような山は避けなければならぬ。里山と奥山の中間域くらいで、登山の対象となっていない無名の山を捜すのがよい。私は今回の他に別の二山を用意しており、今秋と来春に使う予定である。アンケートの結果を見ると、

一、むつかしいが興味がある。再度講習会をやってほしい(七〇パーセント)

二、今回より、もっと迫力のある奥深い山で演習をしてほしい(二五パーセント)

三、山の観察力が向上して登山の深みが増す(八〇パーセント)

四、登山計画を自分で立てる力がつ



イラスト 真田幸俊

く(四二パーセント)

などと意欲的な方が多いのに驚いている。中高年初心者には、経験が乏しいために不安があり、指導標過多の山にもつばら登ったり、引率者の後についてゆく団体登山で妥協しているものの、本当は自分で計画を立てて好みの山へ行きたいと思っている人が多いことがわかった。ただそれはどうやったらいいかわからなく、教えてくれる講習会もなかったという。そのやり方の入口を、今回のR F講習会が初めて示してくれた、という意見を言った人が印象に残る。

■おわりに

天才とは一パーセントの靈感(イ

ンスピレーション)と九九パーセントの発汗(パースピレーション)だという西洋の諺がある。宇治長次郎とデルスウ・ウザラという二人の偉大なる東洋人ルートファインダーのやり方を調べてゆくと、まさにこれだと思ひ当たる。彼らは桑原武夫やアルセーニエフといった普通の人と共に歩きながら、普通の人には真似のできないハイパワーの観察眼を間断なく働かせて山を見、ルートを決定していた。彼らの作図は頭の中に驚くべき精度で書き込まれ、いつでも引き出して照合可能な心象地図として活用されていた。九九パーセントのパースピレーションとはこの部分に当たる。また地形図や磁石など科学的方法を超えた、創造の領域に属する活動でもある。

「実相観入」(斎藤茂吉)とか、「住みこみ」(マイケル・ポランニー)とかの接近法によってルートファインダー(「主体」が山(「客体」と混然一体になる境地、そこから出てくる自然の本質に迫る観察力、観察の結論を頭と心に定着し再利用可能な知見として蓄える作図、作図によって共同化された暗黙知の形式知への変換、これらをキーワードに要約すると、

①一体化 ②観察 ③作図(と経験の共有) ④知識の変換(ナレッジ・コンバージョン)である。この考え

によって論考を進めてきたが、観察力の修練法、経験の共有(R F演習山行の指導法)と作図理論、作図法、及び知識の変換については十分な紙数を割いてはいない。いずれ別の機会に(「山」以外のジャーナルになると思うが)詳しく論及したい。

この論考は一言でいえば開発途上である。数々の試論や仮説を内蔵している。それ故誤ちや改善を要するところが多いに違いない。読者の皆さまからのご叱正、ご意見は喜んでお受けしたいと思います。(完)

■訂正 七月号一八ページ一段一〇〜十一行目、想像は創造の誤りでした。お詫びして訂正します。

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまますば正しい磁気方位です。

重量78g、
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
貴金属メタリック ￥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、郵書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3926-5411 FAX 03-3926-5411

株式会社 石神井計器製作所

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

山岸猛男・著

『丹沢尊仏山荘物語』

山小屋のおやじといわれる人たちの語りは、その山の歴史でもある。これも戦後の丹沢を語る貴重な本ではあるが、それ以上に著者の自然に対する考え方を私どもに教えてくれる、得がたい本でもある。

戦後間もなく京城から引き揚げ、混乱の収まらない一九四七年、自力で塔ノ岳に小さな小屋を建てて、山守の仕事を始めた。以降四十余年の近年まで、登山者の少ない平日や冬期も山にこもり、山と人を見つづけた著者が描く山でのエピソードの数は、読む人を惹きつける。が、むしろ、著者の根底に流れる自然に對

する敬虔なまでの気持ち「自然を通じて自分を見詰めることができた」との一言が心を揺さぶる。

惜しむらくは、著者の健在のうちに出版されたならば、さらに素晴らしかったであろう。著者は今、老人ホームで日々を送っておられるからだ。

(古谷 聖司)

一九九九年八月 山と溪谷社発行
二五六ページ 千六百元

大蔵喜福・著 沢野ひとし・絵

『エベレストのぼらせませす』

—中高年のためのわがまま登山術—

本当は子ども向きの本を作るはずの打ち合わせ中に、中高年向きの「みんな元気で山がいい」という本になった。四度エベレストに挑戦しているのだが、まだ一度も頂上に立っていない。『そんな奴がなぜこの本を』とお思いだろうが、だからこそ書けたと思っている、と著者は「あとがき」で述べている。

中高年(四十歳以上)の登山人口は三百五十万人に迫り、成人登山人口五百十万人の約七割を占める。「独自の信念と、どう登るかの創造力を反映させる登山」がなくては登山文化は衰退するが、中高年には「何でもあり」があつてよい。

山登りの本来の魅力は、もしかす

ると自然が人の心に入り込んでくる形のない精神的エネルギーを知らず知らずのうちに恵んでもらえるからなんだと思った。山が何ほのものが社会ではあまり役立つ特技でもない。金も、命もかかり、身体全能力を傾け、ヨレヨレになつて嬉しがるという、割に合わない遊びである。山と大自然を学習、自己責任で登山する経験を通じて積む修行がある。

本書は、わがまま登山のすすめ、心を鍛えるマインド登山、歩く解体新書、あなたにも登れます、格好よくスマートに山に行く、と五章に基礎と実戦を新しい切り口で語り、六章エベレストのぼらせませす、では「運動の基本は呼吸である」、「無理な行動をとらない限り山は登れる、八千メートルは夢でない、必ず実現できると念じよう」と結んでいる。

(三沢 一三)

二〇〇〇年五月 小学館発行 二
二二二ページ 千三百円

横山厚夫・著

『山麓亭百話』(上巻)

本書の目次を見ると、興味を引く話題がずらりと並んでいる。どの一篇からでも自由に読んでいける手軽さと楽しさがある。当初、山の季刊誌『山の本』に連載するために執筆

を始めたもので、一部は既に連載済みのものも含まれているが、多くは未発表のものである。

内容は、主として山の書物、映画、写真など広い意味での山についての文献類で、それらの文献類を通して山や探検を語り、人を語り、また書物についての話題を綴っている。

著者には先に『山書の森へ』(一九九七年、山と溪谷社)と題するやや啓蒙的な類書があるが、本書では取り上げた話題も豊富で調査も行き届き、軽快でコンパクトにまとめられている。著者は永い間、山歩きと編集の仕事に携わってきただけに、実に話題が豊である。著者の得意とする山岳展望、山の映画、海外探検などからは、読者はきつとまた新たな発見をするに違いない。今まで山の本ではあまり触れられることの少なかった正岡子規、長田秋濤、中島敦らと山との話題も新鮮なものとして受け取られるだろう。また通いながれた吾妻の山小屋で知り合い、「忘れられない人」として綴った一篇は読者の感動を呼ぶ名篇となっている。多くの資料をあさり、事実を確認し、その関連性を調べ、これを三十三篇の話題にまとめたものである。このことは文中の随所に典故が明示され、文末に参考として数多くの関連資料が掲げられていることから

察することができるのである。このような努力と丁寧さが、また本書を一層さわやかなものになっている。落ち着いた装丁も内容にふさわしく美しい。続刊が待望されるところである。

(松家 晋)

一九九九年八月 白山書房発行
一八九ページ 千四百円

松本清・著

『よみがえれ池塘よ草原よ』

サブタイトルが「巻機山ボランテ
イアからのメッセージ」。ご多分に
漏れず百名山ブームも重なって増加
する一方の登山者による荒廃寸前に
あった上越国境の名山に、実戦第一
と自ら率先して二十三年間にわたり
景観保全活動に取り組んだ著者の報
告書である。

実行するにあたり公益法人として
の(財)日本ナショナルトラスト、専門
的な助言と学生という若い力を動員
してくれた東京農大、そして地元塩
沢町の協力を取りつけるという、活
動システムを確立して成功に導いて
いく。木道をつくり、まったくの手
探りからスタートして見事植生を復

元させ、涸れた池塘をよみがえらせ
た。やがてその成果は「第十五回朝
日森林文化賞」として結実する。

池塘破壊に至る様子や修復作業の
過程を、作図や比較写真を豊富に使
って読むものを納得させる。山岳景
観を守ることの重要性が日々増して
くるおかげで、これら活動に携わる
者、関心を持つ者にとって、勇気づ
けられる、ひとつの指針となる書で
ある。

(松本恒廣)

二〇〇〇年三月山と溪谷社発行
二八五ページ 千六百元

日本登山医学研究会編

『登山の医学ハンドブック』

「登山者の安全を医学知識の進歩と
普及によって守る」ことを目的に世
界医学界の先陣を切って発足した日
本登山医学研究会が、二十周年を節
目にその成果をまとめた。

自ら登山愛好家である医師たちが
それぞれ専門とする分野で、最新の
知見を取り入れて執筆している。医
師だけでなく、広く一般登山者にも
読めるものを目指して出版された。
待望の登山に携行しやすい医学書だ。

「1 登山医学概論―山で体をこわさ
ないために」 2 登山中に起こり得る
症状 3 登山中に発病し得る疾患
4 疾病をもっている人の登山におけ
る注意 5 登山中に必要な救急処置
法 6 登山に携行したほうがよい医
療器材と医薬品 7 登山における栄
養をめぐる諸問題 8 ヒマラヤ高所
医学」と病氣、怪我の予防、症状、
処置など広範囲にわたっている。と
くに和文索引と各項目ごとにキーボ
ードの囲みがあり、緊急の場合に
も役に立つ。

難解な医学用語も少なく、分かり
やすい表現で初心者からヒマラヤの
高峰を目指す登山家にも納得のいく
大切な内容が満載されている。また、
病弱で悩める人や持病のある人たち
のために症状に応じた指南があり、
登山医学知識の重要性を改めて感じ
た。「山で体をこわさないために」
登山やトレッキング前に一読し、山
旅に備えてほしい。

(南井英弘)

二〇〇〇年六月 杏林書院発行
二三四ページ 二千三百五十円

深野稔生・著

『宮城山遊び 山語り』

蔵王・二口編、栗駒・船形編

書名から受けるイメージに比べ質
の高い内容を持つ。特色を二点に絞

ると、一つは著者が沢登りの辺境と
する湿原と池沼、並びに水流が形成
する地形の成因の考察。もう一つは
充実した山名考である。前者は南蔵
王と栗駒山の湿原と池沼。南蔵王を
横川本流の貫通丘陵。北面白山北面
の沢その他の争奪地形。大行沢の
石橋などであり、後者は蔵王、栗駒
山、船形山、面白山の山名を、古文
書と民俗学的手法で考究し、さらに
自らの踏査結果を加えて論及してい
る。

なおこれらのほかに林野行政や白
神山地入山禁止論を批判する論説、
菅江真澄が見た栗駒山の風物誌、船
形山と小川登喜夫など興味深い文章
を多数収めている。蔵王・二口編に
は以上と傾向の異なる里山十四座の
ガイドが含まれ、著者の山に対する
幅の広さがうかがえる。

最後に注文を一つ。里山ガイド以
外にも二万五千分の一地図名を入れ
てほしかったことだ。その最たるも
のは産子負山で、文章だけではどこ
にあるか分からず(地図は今宿?)、
山名はもちろん記入されていないの
で推測するしかない。地図名と種明
かしが必要だと思う。

(山田哲郎)

一九九九年十月 (有)無明舎出版発
行 蔵王・二口編Ⅱ二一四ページ、
栗駒・船形編Ⅱ二〇四ページ
各千八百円

今年もさよならで会いましょう

図書受入報告 (2000年6月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
秋月俊幸	日本北辺の探検と地図の歴史	449pp/27cm	北海道大学図書刊行会	1999	出版社寄贈
高山龍三	河口慧海：人と旅と業績	222pp/22cm	大明堂	1999	出版社寄贈
佐古清隆	山岳展望ハンドブック (第1巻)：山名がわかる広角展望図集	205pp/15cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
日本山岳協会 (編)	日本山岳協会40年のあゆみ：創立40周年記念	40pp/26cm	日本山岳協会	2000	発行者寄贈
日本ヒマラヤ協会 (監修)	ヒマラヤへの挑戦 (第1巻)：8000m峰登頂記録	338pp/27cm	アテネ書房	2000	出版社寄贈
日本登山医学研究会 (編)	登山の医学ハンドブック	234pp/19cm	杏林書院	2000	編者寄贈
本の出版社 (編)	登山・ハイキング パス時刻表 (関東版・2000年夏秋号)	519pp/19cm	成星出版	2000	編者寄贈
宮澤憲	ヒマラヤ：一つの峰の物語	301pp/22cm	東京新聞出版局	2000	著者寄贈
原田昌幸 (編)	レッドメイン峰：学習院大学山岳部レッドメイン登山隊1999	88pp/26cm	学習院大学輔仁会	2000	発行者寄贈
共立女子大学山岳部	アルペンローゼ 2000：山岳部創部40周年記念誌	81pp/26cm	共立女子大学山岳部	2000	発行者寄贈
山形県文化環境部 (編)	やまがたの野鳥：第54回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌	191pp/26cm	山形県文化環境部	2000	発行者寄贈
松尾良彦	ナンガとアコンとケニア山：福岡登高会の海外山旅記録	191pp/21cm	松尾良彦 (私家版)	2000	著者寄贈
佐藤勉・坂本知忠	白神山地 [新編]：本州最後の秘境	316pp/20cm	現代旅行研究所	1998	著者寄贈
大場達之他	山の植物誌 [山溪カラー名鑑]	467pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
大場達之他	山の植物誌 [山溪カラー名鑑]	455pp/20cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
大貫良夫	アンデスの黄金：クントゥル・ワシの神殿発掘記 (中公新書 No.1535)	276pp/18cm	中央公論新社	2000	著者寄贈
筑木力	山岳悠々：越後と周辺の山を行く	352pp/20cm	恒文社	2000	著者寄贈
Jan Kielkowski (ed.)	Mount Everest Massif [enlarged & updated / 2nd ed.]	315pp/21cm	Explo	2000	著者寄贈

29日	27日	26日	22日	21日	20日	19日	16日	15日	14日	13日	12日	9日	8日	7日	6日	5日	3日	1日	6月
科学委員会 学生部	自然保護委員会 アルパインスキー クラブ	自然保護委員会 アルパインスキー クラブ	総務委員会 山げらの会 フォトビ デオクラブ	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会	集會委員会 インターネット小委員 会 98同期会 土曜会

6月来室者 600名

ルーム日誌

会務報告

六月理事会

日時 六月十四日十八時三十分～二十

十一時二十分

場所 日本山岳協会議室

出席者 大塚会長、小倉、竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、宮崎、高原、勝山、村井(葵)、宮下、鰐坂、増山、坂井、松原、河西、坂本、高遠各理事、平山、中川、吉永各常任評議員

〔委任〕 大森副会長、中村、神崎各監事、田邊、平野各常任評議員

〔審議事項〕

- 一、平成十二、十三年度秩父宮記念山岳賞審査委員の委嘱(竹内副会長 審査委員の候補者リストが出され 討議。多数の意見が出され、継続検討して来月決定する。)(継続審議)
- 二、(株)ナカニシヤ出版との「新日本山岳志」出版契約締結(小倉副会長 別添資料に示す出版契約書・案(日本書籍出版協会作成の一般用をベースにしたもの)の説明があり契約締結の提案があった。)(承認)
- 三、会員資格の復活に関する内規について(西村)

昭和四十年六月三日の理事・評議員会の議決に基づき、施行されている

た本制度を明確にするため内規案を提案。この内規は本日(平成十二年六月十四日)より実施する。(承認)

四、アルパタ峰メンバー追加選考について(増山)

アルパタプロジェクト実行委員会は、BCマネジャーとして、山中康正さんを推薦する。東海大学山岳部OBで、今月入会予定。(承認)

五、カザフスタン登山協会からの招待受け入れ(増山)

カザフスタン登山協会から同国の山を紹介したい旨のメッセージと、大塚会長、増山宛招待状(八月十五日より二十二日まで、首都アルマトイを中心にへりによる山岳偵察なども含む日程)が届いた。新しい山岳フィールドとして興味深い。宮崎、松原を派遣候補者とする。(承認)

六、ネパールシバプリへの助成金打ち切り対策(河西)

今年度環境事業団からの環境基金の交付が打ち切りとなった。現在五ヘクタールの土地に石楠花、松二千本が植林され、今後三年程度は手をかける必要がある。今年の予算を五十万円計上したい。石楠花は生き物であり、長期的視野に立った方向性が必要である。次回理事会に計画書の提出を求める。(継続審議)

七、(株)講談社出版研究所の写真撮影と掲載許可願(西村)

講談社版「日本人名辞典」(刊行二〇〇一年秋予定)への写真撮影と掲載の許可願があった。(承認)

〔報告事項〕

一、日中友好登山二十周年記念事業について(西村)

中国山岳協会より五月末、機構改革、役員改選があり平常に機能するのにはしばらく期間を要する。学生登山は休みをとることが難しい。今回は見送りたい。以上により今年度の標記事業は取りやめる。

二、(財)自然公園美化管理財団の評議員への大塚会長再任を了承。

三、第四回加賀市《深田久弥「日本百名山」写真コンテスト》の後援を承認。

四、二見書房に対し「深田久弥の山がたり」(第三巻・神々の峰)の内容に沿った資料(写真・図版・書籍)の写真撮影、書籍掲載願いを許可。

五、上越市「日本スキー発祥記念館」へのスキー寄託延長を了承。

六、青森支部の「白神山地体験林業(フナ林再生事業)実施計画」を百周年記念事業の一環として実施される旨報告された。(以上西村)

七、行事参加報告・予定

①五月十三日開催の勤労者山岳連盟四十周年行事に竹内副会長、五月二十七、八日開催の山梨支部・木暮碑前祭に高原が参加。

②五月二十七日開催の日本山岳協会四十周年行事に大塚会長が出席。

③六月四日開催の上高地ウエストン祭に参加した大塚会長が報告。

④六月九日開催のUIAA主催シェーベルト氏の歓迎会に出席した坂井より、ドイツ山岳会の現状(会員数が六十二万人、年間予算三十一億円、入会金五千円、七、八歳の会員もいる、三百ある山小屋が利用できる等)の報告。

⑤七月八日、日本ヒマラヤ協会の登山隊(スパンティーク等)の壮行会。

⑥七月十四日、四団体懇親会の予定。

八、委員会報告

総務委員会・高原

チャーターで便行く《毎年好評です》

ネパール・ヒマラヤトレッキング9日間

ハーレクインエア 10/30 ● 11/5 発

ジャルウェイズ 11/3 ● 11/10 ● 11/17 発

■エベレスト街道、ゴラバニ、ランタンなど、詳細資料ご請求下さい。

運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員



ALPAIZA サービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

①委員会・同好会連絡会議を六月二十六日(月)午後七時より会議室において開催予定。

②「入会のしおり」改訂版を作成中。財務委員会・村井(龍)

今年度の会計報告。

会報編集委員会・村井(葵)

「山」六月号は、「インターネットの現状」「会員としてみる有珠山」など。医療委員会・増山

六月三、四日、第二十回日本登山医学シンポジウムが慈恵医大講堂で開催され、日本登山医学研究会の浜口欣一会長「ダイヤモックスの功罪」講演等のテーマが取り上げられた。

アルバータ実行委員会・増山

①アルバータ峰登山にサンケイ新聞社の記者、カメラマン各一名がBCまで同行。六月二十八日、カナダ大使館において大使主催の登山隊激励会が開かれる予定。

②募金状況は現在二百二十五万円(百三十七名)となっている。

ミニ水力発電・小倉副会長、坂本

①「ミニ水力発電装置」完工式が五月十五日(月)上高地現地において、有馬佳明安曇村長をはじめ約六十名の出席者のもと執り行われた。

②取水口に枯葉などが詰まり、水量が減少することがおこっている。改修を行い安定取水に努力する。

青年部・松原

六月八日、第一回目の会合を行い二十五名が出席。まず集まって、国内の山をグランドとして考えている。山研委員会・坂本

①利用料金について「支部会友(将来の当会入会予備者)は会員に準ずる」とし、本年七月より三千円とする。なお、利用申し込みは「支部長、または事務局担当者が山研管理人に連絡し利用を申し込む」とこととする。

②本年四、五月の利用者数は百五十三人、昨年、一昨年より大幅に増九、その他

勝山理事より「JAC会員のあり方」についての議論を交わす必要があるのではないかと意見があった。

■会員移動
物故
坪井圭之助(一〇六三三)99・12・1
竹内駿一(一一五五四)00・6・9
高木武夫(四七七六)00・6・13
濱部博一(一一九〇〇)00・6・18
田中政一(四二二二)00・6・21
五十嵐篤雄(二七八五)00・6・29
退会

安藤正明(一一三三〇)
菅野弘子(一二〇四五)
塩谷榮(一二六四三)
終身
宗實慶子(五〇〇八)
福田勝一(五一五六)

INFORMATION



イラスト・村上直温

◆穂高周辺でこの山行

集会委員会

東北地方に偏り気味だった山行を久しぶりに穂高周辺にしてみました。

日程 九月三十日(土)〜十月一日(日)

上高地山研泊

三十日 中ノ湯バス停集合

行程 焼岳登山 徳本峠往復

費用 一万円

締切 九月十日(山研泊のため定員あり)

申込 勝山康雄宛(千三三四・〇〇五七川口市安行原一二六二・三五)

Fax 〇四八・二九四・九六四六)必ずハガキかファックスで、会員番号、住所、電話番号を明記のこと。

*申込者には詳細資料を送付します。

◆焼岳登山と山研ミニ水力発電見学

科学・山研運営委員会

紅葉の上高地を訪ねて焼岳登山を楽しむ、さらにミニ水力発電を見学して自然環境保全へ向けた今後の展

望を語り合います。

日程 十月十四日(土)〜十五日(日)

十四日 午前六時山研集合 焼岳登山

山

十五日 ミニ水力発電施設見学後ミニ講演と懇談会

費用 一万円(宿泊、食事三食分)

交通費は各自負担

締切 先着順、定員二十名。

申込・問合せ 石田要久宛(千一七六・〇〇三) 練馬区羽沢

一・二・六 Tel & Fax 〇三・三九九一・八六二五) ハガキまたはファックスで。

*申込者には詳細資料を送付します。

◆二〇〇〇年度自然保護全国集会

自然保護委員会

福井支部の協力を得て、荒島岳のふもとと越前大野市で開催します。

日程 十月十四日(土)〜十五日(日)

十四日 ①総合議題「百名山と登山道の荒廃」

十五日 ①荒島岳登山②自然観察会

会場 扇屋旅館

費用 一万二千元(予定)

申込 川越尚子宛(千一八五・〇〇一一国分寺市本多三・七・三一) ハガキで。

*申込者には詳細を連絡します。

◆山研で山岳写真展を開催

フィルムビデオ委員会

フィルムビデオ委員会、フォトビ

2000年記念
「山岳写真展」の作品募集

山岳写真展運営委員会

今年の夏山の成果はいか
がだったでしょうか。

会報「3月」号でお知らせ
した通り、本年度年次晩餐
会では会員の皆さまの山岳
写真を展示することになり
ました。9月1日より応募
を開始しますのでぜひご出
展ください。締切は9月30
日です。傑作をお待ちして
います。

応募票は事務局に用意して
あります。細目は会報「3月」
号をご参照ください。

問合せ：フィルムビデオ
委員会・委員長 羽田栄治
(TEL: 03-3399-3975)

デオクラブ共催、山研の協力で山岳
写真展を開催します。
期日 九月二十日(水)～十月十五日
(日)

会場 上高地山岳研究所地下ホール
◆高尾体験林業

自然保護委員会

日本山岳会高尾の森(仮称)の整
備作業を行います。体力に依じて作
業します。見学だけでもかまいませ
ん。会員外の方も大歓迎です。

日時 十月二十八日(土)

集合 九時JR高尾駅

持物 弁当 飲み物 軍手など(あ
ればノコギリ、ナタ、ヘルメ
ット、なければ借りられます)

費用 五百円(保険ほか)

解散 十六時JR高尾駅予定

申込 十月十五日までに川越尚子宛

(〒一八五・〇〇一一国分寺

市本多三・七・三一 Fax〇四

二・三二一・六〇五九) ハガ

キカファックスに参加者名、
電話番号を明記。

◆白神山地のブナ林再生事業

青森支部

日本山岳会百周年事業の一環とし
て、自生する樹種の育樹、植林作業
を通し、白神山地本来の自然の再生
を促したいと思っています。

日程 九月八日(金)～十一日(月)

八日 鯉ヶ沢町「くまの湯」に夕方

までに集合

九日 九時「くまの湯」を車で出発、

午後作業

十日 作業

十一日 作業 十六時「くまの湯」

解散

場所 青森県西津軽郡鯉ヶ沢町櫛石

山付近の国有林

*途中参加の場合は直接現地へ。徒

歩片道三時間。

宿泊 現地テント泊 一泊千五百円

「くまの湯」一泊七千円

申込・問合せ 村田孝嗣宛(〒〇三

六・八三三三) 弘前市浜の町

東五・三・一九 fax〇七二・

三三・四六八七)

メール danbur@info.somori.ne.jp

*希望者には詳細を連絡します。

◆99同期会、九月の山行

日程 九月三十日(土)～十月一日(日)

集合 JR東京駅日本橋口二十三時

(貸切バス)

山行 恵那山・川上岳

宿泊 下呂温泉 民宿みやのや

申込 大森義昭宛(〒一三四・〇〇

八八江戸川区西葛西五・一

一・八・七〇三 TEL&Fax〇

三・五六五八・五一〇七) 氏

名、会員番号を明記の上ハガ

キカファックスで。

◆ジャック93会、初秋の山行

日程 九月三十日(土)～十月一日(日)

一泊二日

集合 九月三十日十六時光徳小屋

現地参加も可

宿泊 学習院光徳小屋(自炊)

行程 丸沼高原スキー場より(ゴン

ドラ利用) 白根山に登り湯元

光徳へ(約六時間)

費用 約六千円

申込 九月十五日までに花澤廣巳宛

(〒一五七・〇〇七二世田谷

区祖師谷一・一七・八) ハガ

キに会員番号、住所、氏名、

電話番号(Fax)を明記。

*申込者には詳細を送付します。

◆97同期会、夜叉神峠親睦ハイク

日程 十一月十一日(土)～十二日(日)

十一日 JR中央線甲府駅九時三十

分集合 甲府駅(タクシ

ー) 夜叉神峠登山口(夜

叉神峠) 高谷山・檜尾峠

桃ノ木温泉(泊)

十二日 自由行動

宿泊 桃ノ木温泉(TEL〇五五二・八

八・二〇一〇)

費用 宿泊Ⅱ約八千円 タクシ

代Ⅱ片道約千五百円 他

申込 ハガキに①ハイク②親睦会③

宿泊参加希望を明記し十月末

日までに日本山岳会事務局・

97同期会メールボックス宛

問合せ 池谷健(TEL〇四二二・六

六・二四八五)

■訂正 7月号二ページ四段一〇

行目の物故者井口勇は井口正男の誤

りでした。お詫びして訂正します。

日本山岳会会報 山 663号

2000年(平成12年)8月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

ホームページ: http://www.jac.or.jp

Eメール: jac-info@jac.or.jp

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社